

卒業論文

# セレンディピティの組織的導入に関する一考察

提出日 2008年1月29日

指導教授

齋藤 正武 准教授

中央大学商学部

学科 経営学科

学籍番号 04C1102017G

氏名 矢野浩章

## セレンディピティの組織的導入に関する一考察

中央大学商学部経営学科

学籍番号 04C1102017G

矢野 浩章

研究開発者が成功を修める過程には多くの場合、偶然からの発見があると言われる。研究開発においては論理的に積み重ねていっただけでは成功には結びつかない。この偶然からの成功は「セレンディピティ」と呼ばれ、MOT (Management of Technology : 技術経営) の中で注目されるようになってきた。しかし、現在使われているセレンディピティという言葉には明確な定義はなく、過去の実例からのみで議論されているあやふやなものである。そして、その評価も確立されているとは言えない。そして、セレンディピティの活用法や評価に対する研究も緒についたばかりである。

そこでセレンディピティを明確にすることで活用法を発見することができるのではないかと考えた。過去の実例、大学や企業からの調査などからセレンディピティを明確に定義し活用法を見つけることで研究開発者の研究の正しい評価ができるのではないかと。直接収益に結びつかないような研究が評価されにくいという傾向の強まる今日において、個人やチームの生み出したセレンディピティの評価法を提案することで、研究開発者の支援とすることがこの研究の目的である。

具体的には本研究ではまず様々な成功事例の収集をして、事例からセレンディピティの過程の研究を行った。複数挙げられたモデル化から、セレンディピティには「発見」「発想」「実行」という3つの重要な要素があることが分かった。このうち比較的、個人差が大きい「発想」－「実行」の過程からセレンディピティを $\alpha$ 型、 $\beta$ 型の二つに分類した。さらに $\alpha$ 、 $\beta$ ごとにモデル化し、収益や社会に対する貢献度の考察を行った。それに加え、過去の事例に技術・市場における新規・既存、ハイテク・ローテクなどの要素も加え、セレンディピティの組織的導入に関する考察を行った。提案を行った評価法は、個人の努力の成果を現しやすいという点で個々のセレンディピティという切り口を用いた。

本論文ではセレンディピティの過程の研究、目的別の分類、技術・社会・収益の3要素からの評価の提案までを行ったが、その反面、セレンディピティに対しての視点は過程と成果で統一した繋がりが見つけられなかったのも事実である。また、技術・社会・収益からの評価も正確な値が図れたとは言い難い。しかし、セレンディピティに関する研究は緒についたばかりで、今後モデルに関して精緻化を行う必要がある。